

NEWSLETTER

No.2
Vol. 41
2015.3

What's
New

「開学40周年記念式典挙行」

「大学の機能強化—光医学教育研究拠点形成事業—」

地域に根ざし世界をリードする大学として





開学40周年 学長メッセージ

平成26年6月7日をもって浜松医科大学は開学40周年を迎えました。昭和49年の開学以来、県内唯一の医科大学である本学は、特徴のある、きらりと光る大学を目指し、発展してきました。

平成16年の法人化は、歴史的な大学改革ともいえる変革であり、また、その年は本学開学30年目でもありました。法人化以後の10年間は、その次の20年のための基礎づくりであり、将来への投資期間であるとの考えで整備を進めてきました。30年以上経た施設、設備、そして規則・規程等を見直し、また教育・研究活動、病院経営などすべてにおいても大きな変化を経ました。中期目標・計画の達成に向けて、組織の改善や効率的な運営努力をしながら、無我夢中で駆け抜けてきた10年間でした。継続性のある発展は地道な努力の積み重ねにより実現するものであり、教育・研究・医療現場、それぞれの分野において着実に成果をあげております。

大学の最も大きな責務は人材育成であり、医療の現場においても重要な役割を担うものです。本学の医師国家試験合格率は常に上位にあり、看護師、保健師、助産師の国家試験で

は毎年ほぼ100%の合格率を誇っています。創立からの40年間に、医学科は3,460名、看護学科は1099名、助産学専攻科は82名が本学を巣立ち、全国で医療・研究の各分野で活躍されております。大学及び研究機関などの管理職として活躍されている卒業生は、分かっているだけでも27名に上り、地域の医師会長などの要職に就く方も多くなっています。

医学科卒業生のうち約50%が県内で活躍していますが、今後は60%以上が県内に定着し、静岡県に貢献していける環境づくりを目標にしております。平成28年度からは世界医学教育連盟(WFME)グローバルスタンダードに準拠した新カリキュラムをスタートし、広い視野をもって実践できる医療人材の育成体系を構築します。

看護学科は、本学医学部附属病院を積極的に活用したハイレベルな学習を展開しています。高齢者の在宅ケアに貢献できる人材の必要性はますます高まっており、研究心を持ち、指導的役割を果たせる人材の輩出と活用を目指したいと思います。

助産学専攻科は、平成27年度から大学院

修士課程になります。今まで以上に難しい分娩を扱えるようになりますし、若い助産師を教育できるようになるでしょう。

研究の分野においては、ものづくりの盛んな浜松市の特徴をとらえ、浜松ホトニクスなど多くの企業と共同研究を進め、光技術の医学への応用、医療機器の開発に取り組んでいます。研究成果を臨床にフィードバックし、難病の診断・治療に積極的に展開しており、高い評価に裏付けられた成果を上げています。他大学より先んじている光に関する研究を更に推進し、産学連携の下で光技術を医学に応用し世界に先駆けて確立・普及させるために日々努力しております。

現在、第2期中期目標期間の後半になりましたが、第3期へ向けて改革を進めています。浜松医科大学は次の10年、20年を、地域に根ざし世界をリードする大学にますます発展していきます。引き続き、学内外皆様方のご支援、ご協力をいただきますよう、心よりお願い申し上げます。

国立大学法人
浜松医科大学 学長 中村 達

What's
New
トピックス

開学40周年記念式典挙行

11月22日(土)浜松市内において、開学40周年記念式典を挙行しました。教育、医療関係者ら約300人が出席しました。

式典では、中村達学長が「社会の変化に応じて地域貢献に尽くし、世界にきらりと光る研究成果を発信していく」と述べ、さらなる発展を誓いました。

下村博文文部科学大臣(代読:吉田光成国立大学法人支援課企画官)、塩谷立

前衆議院議員、伊東幸宏静岡大学長、大須賀淑郎静岡県副知事、篠原彰静岡県医師会長からご祝辞をいただきました。

また、開学40周年を記念して公募したシンボルマークの発表と表彰式を行いました。

式典終了後には、「いのちはだれのものか?」と題して、大谷大学教授・せんだいメディアテーク館長の鷺田清一先生による講演会を開催しました。

引き続き開催した祝賀会では、遠山敦子元文部科学大臣、城内実前衆議院議員(代読:鈴木顧問)、鈴木康友浜松市長、滝浪實浜松市医師会長からご祝辞をいただき、鏡開き、山崎昇元学長の乾杯の発声で幕を開けました。本学学生管弦楽団の演奏や懇談の後、梅村和夫同窓会長の謝辞で閉会しました。



開学40周年を機に、本学の特色や個性を社会にアピールし、地域の方々に親しみをもってもらえるようなシンボルマークを全国一般公募しました。291点の応募作品の中から、デザイナー小池友基氏の作品を最優秀賞として「シンボルマーク」に採用されました。

シンボルマークは今後、本学ホームページや出版物などあらゆる場面で活用されます。

CONCEPT

本学のローマ字での頭文字「h」をデザイン化。水色部分が遠州灘(下部分の曲線)、浜名湖の水面、浜松から望む富士山(右上の突起)で浜松の特色、全体の曲線が生命の源である自然な水のゆらぎが医療の重要キーワード「生命」を表現しています。また、オレンジ色の丸と水色部分の両方を合わせて全体を見ると、元気、健康、躍動を表現した人(丸を頭、水色の両端を手に見立てる)に見えます。人類の健康と福祉に貢献することをイメージしています。

目次

トピックス 1-4

- 開学40周年記念式典挙行 1
- 開学40周年 学長メッセージ 2
- 大学の機能強化 —光医学教育研究拠点形成事業— 3-4

研究最前線 5-7

- 日本人四肢形成不全(裂手裂足症 および類縁疾患)の原因を解明 5
- 子宮内膜症の治療を目的とする分子標的薬剤 6
- 気象因子と頭痛の関連 —市販鎮痛薬の売上を用いて— 7

公開講座ズームイン 8

- 進化を遂げた新時代の消化管検査:カプセル内視鏡

退職によせて 9-11

新任職員の紹介 12

海のおこうで 13-14

- ロンドン大学セントジョージ校での1ヶ月 13
- モンゴルでインタビュー調査を行って 14

大学ニュース 15-22

- 助産師養成コースが専攻科から修士課程に変わります 15
- 学会賞等受賞 16-18
- 各種行事 19-20
- サークル紹介 21
- 留学生の紹介 22

寄稿 23-24

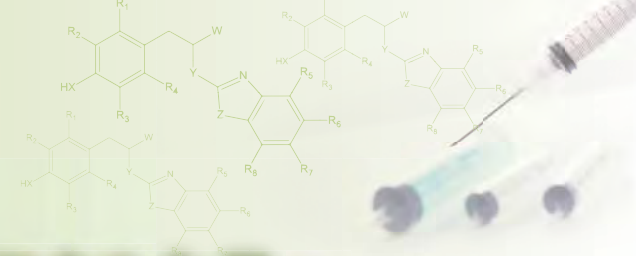
- Nursing café '和(なごみ)'を企画して 23
- 附属病院でのクリスマスイベント 24

卒業生は今 25-26

- 新薬を世に送り出すために 25
- 看護師・保健師はもっと活躍している!!!
～大学病院▶透析病院▶訪問看護ステーション
▶ソーシャルベンチャーという働き方を通して～ 26

表紙の写真
管理棟の改修が完了し、
全貌を現した本学建物群
平成27年1月撮影





光医学分野で日本・世界をリードする大学へ

光医学研究のリーダーの養成、光を用いた最先端医療の研究、地域企業との連携による機器開発・事業化を進めて、「光医学分野で日本・世界をリードする大学」を目指します。

光医学教育研究拠点形成事業 ～地域特性と実績を活かした光医学のさらなる発展～

県内唯一の医学部のある大学として、社会から期待される役割と機能を十分に果たすべく、本来の目的である教育研究の質の向上を図り、本学の特色・強みである光技術等を用いた先進的医学研究を産学連携により発展させていきます。さらに、ものづくりの基盤である製造業が盛んな地域特性を活かした医療機器の開発を推進し、イノベーションを創出していきます。また、次世代を担う人材育成活動として、「光医学研究のリーダー」「光医学の素養を持った医療人」を養成していきます。これらの目的を達成するために、光医学教育研究拠点形成事業を推進し、本学の教育・研究をさらに機能強化します。

特性

浜松市には、世界的企業である浜松ホトニクス社が在り、本学は同社から寄附講座（平成元年10月開設）を受け入れるなど永年に亘り「光の医学応用研究」を共に進めてきました。さらに、平成18年には包括的技術交流契約を締結し連携体制は強固なものとなっています（共同研究件数等、図を参照）。そのような中、本学と同社、静岡大学、光産業創成大学院大学の市内4組織は「浜松を光の尖端都市に～浜松光宣言2013」を発表しました。浜松

には、他にも「ものづくり」企業が多数集積しており、浜松商工会議所が主宰している浜松医工連携研究会の参加企業数は130社にも上っています。すなわち、浜松には、高度な光技術と盛んな「ものづくり」という地域特性があります。このような恵まれた環境のもと、本学は、「細胞」から「個体（含人体）」、「基礎医学」から「診療」までを網羅的に対象にできるイメージングコンプレックス体制（イメージング教育研究機器集合体）を築いてきました。また、探索的臨床研究施設（平成13年12月竣工）も有し、大規模な治験実施体制を整備しています（とおとうみ臨床試験ネットワークの参加病院8施設 4100床）。国内には、このように医療機関の近くに多様なイメージング機器を設置・稼働させ、充実した研究環境が整備されている機関はありません。また、人材育成の面では「浜松医科大学メディカルフォトリクスコース」（MPC）を、平成4年から毎年開催し、これまで全国から多数が受講しその中から教授・准教授が誕生しています（図参照）。

には、他にも「ものづくり」企業が多数集積しており、浜松商工会議所が主宰している浜松医工連携研究会の参加企業数は130社にも上っています。すなわち、浜松には、高度な光技術と盛んな「ものづくり」という地域特性があります。このような恵まれた環境のもと、本学は、「細胞」から「個体（含人体）」、「基礎医学」から「診療」までを網羅的に対象にできるイメージングコンプレックス体制（イメージング教育研究機器集合体）を築いてきました。また、探索的臨床研究施設（平成13年12月竣工）も有し、大規模な治験実施体制を整備しています（とおとうみ臨床試験ネットワークの参加病院8施設 4100床）。国内には、このように医療機関の近くに多様なイメージング機器を設置・稼働させ、充実した研究環境が整備されている機関はありません。また、人材育成の面では「浜松医科大学メディカルフォトリクスコース」（MPC）を、平成4年から毎年開催し、これまで全国から多数が受講しその中から教授・准教授が誕生しています（図参照）。

取組

今回の機能強化では、既存のメディカルフォトリクス研究センター、動物実験施設、実験実習機器センター及び産学官共同研究センターを統合して、横断的に研究を推進するための光先端医学教育研究センターを設置します。新センターには光トモグラフィ（光CT）の研究開発を推進するため、近赤外光を用いた拡散光トモグラフィ研究の世界の第一人者を平成27年4月に招聘し、新しい研究室を設置します。拡散光トモグラフィ研究は、これまで本学で行ってきた光マンモグラフィや、脳深部光診断技術の開発、蛍光トモグラフィのための創薬開発等とも深く関連するので、融合研究も期待できます。また、手術用

立体内視鏡や質量顕微鏡のように、実用機開発まで進展した例も着々と増えており、産学連携による事業化も強化していきます。そのためには新たなシーズの発掘も重要で、はままつ次世代光・健康医療産業創出拠点（通称：はままつ医工連携拠点）の運営も担っている産学官共同研究センターに、機能強化の一環として、「医療知識」、「工学知識」を持ち、産学連携や知財に明るい教員を配置することも計画しています。加えて、浜松ホトニクス社の本学寄附講座の研究環境拡充を鋭意進めており、そこには、同社開発の新たな光機器（世界唯一の定量位相顕微鏡等）の設置も行われ、既に今後の共同研究発展の新たな

な足がかりとなっています。さらに、次世代を担う人材育成として、前記MPC等のコースや講義、講習会の発展的開講も進めて、企業人を含めた「光医学研究のリーダー」等、人材養成も行います。新しい医学部のカリキュラムでは、学部学生を対象とした「光基礎医学コース（仮）」や「光・イメージングシミュレーション医療トレーニングコース（仮）」等を設け、実施することで、「光医学の素養を持った医療人」の養成も行います。この医療人が医療現場でのニーズを大学にフィードバックすることで光医学研究・教育のさらなる発展を促し、好循環とイノベーションにつなげます。

光先端医学教育研究センターの設置

- 医学部
 - 医学科
 - 看護学科
 - 附属病院
- 大学院医学系研究科
- 附属図書館
- 保健管理センター
- メディカルフォトリクス研究センター
 - 動物実験施設
 - 実験実習機器センター
 - 産学官共同研究センター
- 安全衛生管理センター
- 医療廃棄物処理センター
- 情報基盤センター
- 子どものこころの発達研究センター
- がん教育研究センター
- 医学教育推進センター

光先端医学教育研究センター

達成目標

機能が強化される事項

- 横断的な研究推進により光最先端医療に関する新たな学際的研究分野・研究シーズを創出
- 光断層撮影診断法開発等の全く異なる概念の医療技術・機器開発
- イメージングコンプレックス体制を活用した基礎医学から診療までの研究の発展
- 高度先端光技術と最新オミックス手法の相乗的活用による先端臨床光分子医学の実践
- 光医学のリーダーとなる人材の育成、光医学の素養を持った医療人の輩出
- 先端的イメージング医療機器を活用する地域の医療人や医療関係企業人の輩出

次世代を担う人材育成に必要な措置

カリキュラムの新設・プログラム等の発展的実施

基礎的 教育	<ul style="list-style-type: none"> ● 「光基礎医学コース（仮）」（学部学生）の新設 ● 「光・イメージングシミュレーション医療トレーニングコース（仮）」（学部学生、卒後医師、企業人）の新設
専門的 教育	<ul style="list-style-type: none"> ● 「PET学講義シリーズ」、「質量分析法・質量イメージング法講習会」（大学院生、医療関係企業人）の発展的開講 ● 「メディカルフォトリクスコース」（大学院生、卒後医師、企業人）の発展的開講

医学教育推進センターの強化 → 推進要員等（教育システム管理教員）の配置
光医学教育のシミュレーションセンター施設・設備の整備

施設・設備の強化の計画

<ul style="list-style-type: none"> ● 光医学教育用シミュレーションセンターの拡充 ・ シミュレータ等の整備 ・ シミュレーションセンターの改修整備（平成28年予定） 	<ul style="list-style-type: none"> ● イメージングコンプレックス体制整備計画 ・ 多光子励起レーザー走査型顕微鏡システム ・ 光技術小動物用イメージングシステム ・ 遺伝子・機能解析システム ・ プロテオゲノム解析システム
---	--

事業による達成目標

- 光先端医学教育研究センターの設置による研究力強化
 - ・ 拡散光トモグラフィのための基礎的研究と実用化
 - ・ 蛍光トモグラフィのための創薬開発・基礎的研究と実用化
 - ・ 脳深部光診断技術の開発
 - ・ 光学式3Dスキャナを用いたインテリジェント内視鏡手術ナビゲーション装置の実用化
 - ・ 中赤外光（テラヘルツ波）の医療への応用、無染色の病理組織診断機器開発及び実用化
- 次世代を担う人材育成
 - ・ 学部学生に対する基礎的教育では光医学の素養を持った医師を養成
 - ・ 大学院生・若手研究者に対する専門的教育では光医学の次世代を担うリーダーとなる人材を養成

「はままつ」の環境
(地域特性)

- 「光の尖端都市HAMAMATSU」（浜松光宣言）
- 浜松ホトニクス(株)との連携体制（共同研究14件進行中）
- 「ものづくり」の企業が多数集積（共同研究16件進行中）

はままつ次世代光・健康医療産業創出拠点

浜松医大の体制
(大学特性)

- 「細胞」から「個体」まで「基礎医学」から「診療」まで
- ・ イメージングコンプレックス体制
- ・ 実績ある探索的臨床研究施設
- ・ 整備された治験実施体制（とおとうみネットワーク）
8病院 4,600床

**研究成果
人材育成の
実績**

平成4年から毎年開催、これまで全国から**若手研究者854名**が受講し、**教授36名、准教授32名**誕生（平成24年現在）

研究成果の実績

- 頭部PET装置の開発
- 手術用立体内視鏡開発
- 質量顕微鏡の開発(製品化)等

人材育成の実績

- 浜松メディカルフォトリクスコース
- 「PET学講義シリーズ」、
- 「質量分析法・質量イメージング法講習会」

イメージングコンプレックス体制

ファイバー共焦点顕微鏡
[新開発] (個体・臓器)

質量顕微鏡 (組織・細胞)

探索的臨床研究施設

附属病院

蛍光イメージング
(個体・臓器・組織)

サイクロトロン
(放射性核種合成)

ヒト用PET/CT

蛍光イメージング
(個体・臓器)

ヒト頭部専用PET
[新規開発]

16ch X線CT
(個体・ヒト)

3T-MRI
(個体・ヒト)

GMP ホットラボ
(ヒト用PETプローブ合成)

PET/SPECT/CT
(小動物個体用)

イメージングコンプレックスとは、イメージング教育研究機器集合体をいう。本学は、多様なイメージング機器を設置・開発し、それらを活用できる人材とノウハウを有しており、基礎から臨床までの幅広い医学研究と医療及び人材育成に活用している。図には代表的な機器を列挙している。

気象因子と頭痛の関連

— 市販鎮痛薬の売上を用いて —

私は、現在、健康社会医学講座博士課程に通う社会人大学院生です。また普段は薬局薬剤師として日々患者さんへの服薬指導を行っております。仕事をしながらの研究は大変ですが、充実した日々を送っています。一般的には薬局薬剤師は研究の場からは遠く離れた存在と思われるかもしれませんが、薬局やドラッグストアの中にも研究の種は潜んでいます。

今回、気候の変化と頭痛の関連をテーマに研究してみようと思立ったのは、日ごろの服薬指導の中で頭痛患者さんがよく口にする言葉が気になったからです。「もうすぐ台風が来るからいやだな。」「明日は雨が降りそうだから、頭がちょっと痛い。」等々、頭痛は悪天候と関連しているという方がとても多いのです。

この研究を行うに際してまず頭に浮かんだのは頭痛の患者さんと病院や診療所を受診する人はあまりおらず、市販薬を買って治そうとする人が多いのではないかとことです。そこで私は、頭痛発症時に、医師に受診する患者ではなく、市販薬購入での治療を行う患者に着目しました。また、鎮痛薬はいくつも種類がありますが、その中で薬剤師による対面販売が必要なロキソプロフェン(ロキソニンS)を

選択しました。

研究方法としては、ドラッグストアチェーンにおいて、1年間のロキソプロフェンおよび一般医薬品の売上高を日ごとに収集しました。売上そのものは、休日やセールには大きく上がるというような社会環境因子による影響を受けます。そこで、ロキソプロフェン販売数量の変化を補正するため、同様な売上の動きをする一般医薬品全体の売上高に対するロキソプロフェン売上高の割合を算出し、そのロキソプロフェン売上高割合をアウトカムとして用いました。また気象庁のウェブサイトより、同時期の調査地域の気象データを入手し、それらをもとに気象因子とロキソプロフェン売上割合の関連を明らかにするための分析を行いました。その他にロキソプロフェンの服用目的を把握するため、対象薬局で1週間という期間でロキソプロフェンの購入者すべてにアンケート調査も行いました。その結果、多くの人は頭痛が原因でロキソプロフェンを購入していました(表1)。また大半の人が頭痛発症の直前または直後の購入であり、ストックとしての購入は2割弱でした。

分析の結果、ロキソプロフェン売上割合は、購入当日の降水量が多く、日照時間

が短く、気温の低いときに増加し、また購入日前日に比べて当日の気圧が低下しているとき、降水量が増加しているとき、平均湿度、最小湿度が上昇しているとき、つまり悪天候になるときに増加していました(表2)。これまでも頭痛と悪天候の関連について報告している研究はいくつかありますが、この研究は鎮痛剤の売上データを用いて気象と頭痛発症の関連を明確にした初めての研究ということもあり、国際的な生物気象学専門誌にアクセプトされました。薬剤の売上という医師を受診しない患者の動向を把握できるビッグデータを用いて、関連を解明できたことは大きな意味があると考えております。この研究で、天気予報を参考にして患者に症状への注意を促す有効性が裏付けられました。

今回ふとした疑問から始めた調査は大きな実を結ぶことができました。今後も身近な事象にいつもアンテナを立てて、研究活動を続けて参りたく思っております。

発表論文

Ozeki K, Noda T, Nakamura M, Ojima T. Weather and headache onset: a large-scale study of headache medicine purchases. International Journal of Biometeorology. 2014.



大学院医学系研究科(博士課程) 3年 健康社会医学講座
尾関 佳代子



健康社会医学講座の構成員
最後列左から2番目が筆者 / 最前列左から柴田助教、中村准教授、尾島教授、岡田助教

表1 ロキソプロフェンの購入時の症状(複数回答)

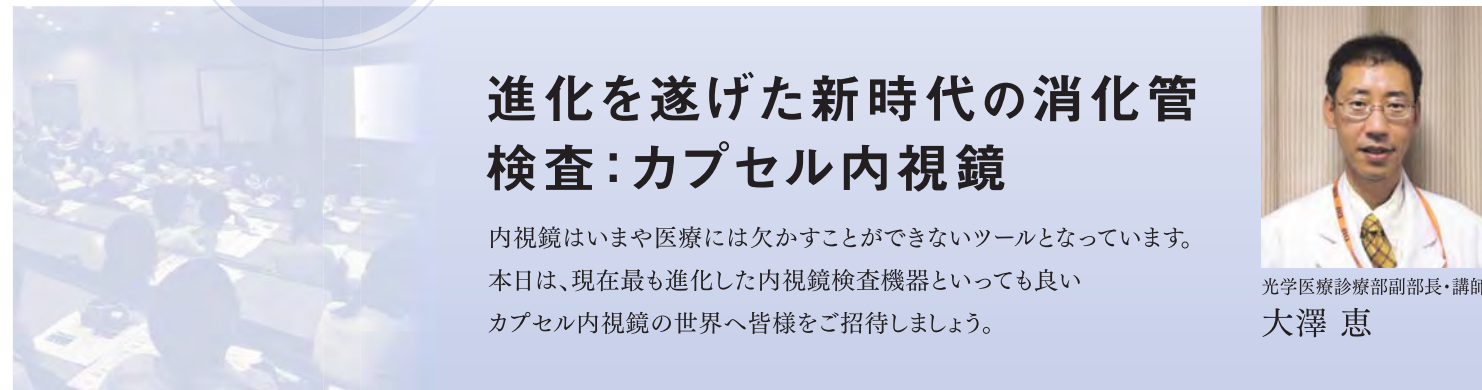
	人数	%		人数	%
頭痛	372	55.5	腰痛	67	10.0
生理痛	176	26.3	肩こり	44	6.6
歯痛	87	13.0	その他	145	21.6

表2 ロキソプロフェン売上高割合と気象因子の関連

	モデル①		モデル②	
	当日の気象因子 標準化回帰係数(β)	p値	前日からの気象因子の変化量 標準化回帰係数(β)	p値
降水量	0.166	0.002	0.158	0.002
最高気温	-0.123	0.018	0.022	0.676
日照時間	-0.114	0.030	0.019	0.712
平均気温	-0.104	0.047	0.064	0.220
最低気温	-0.085	0.103	0.074	0.156
平均気圧	0.085	0.103	-0.115	0.027
最小湿度	0.064	0.219	0.111	0.034
平均湿度	0.039	0.462	0.152	0.004

本学では毎年大学の夏休み期間中に、一般の方を対象とした公開講座を開催しています。

今年度は「健康のために知っておきたい話—医療における最新の話題—」をテーマに、3日間(各日2講義)合計6講義を実施しました。今回は、その中から特に人気のあった講義をピックアップしてご紹介します。



進化を遂げた新時代の消化管検査:カプセル内視鏡

内視鏡はいまや医療には欠かすことができないツールとなっています。本日は、現在最も進化した内視鏡検査機器といっても良いカプセル内視鏡の世界へ皆様をご招待しましょう。



光学医療診療部副部長・講師
大澤 恵

内視鏡の歴史からカプセル内視鏡の誕生まで

生きている人の消化管の中を最初に見たのは、1868年にドイツの医師 Kussmaulで、当時は金属の筒の内視鏡(硬性胃鏡)を剣を飲み込むことができる大道芸人に飲んでもらって観察したそうです。胃カメラの原型は1950年には東京大学とオリンパスで開発され、ファイバースコープの時代を経て、現在はCCDカメラを搭載した電子スコープの時代となっています。これらの内視鏡はいずれも管を体内に入れるため程度の差はあれ苦痛のある検査でした。そんな中、体に直接触れることなく体内を観察できないかと開発が続けられてきたのがカプセル型内視鏡です。2000年に初めて科学雑誌『Nature』に報告され、海外で小腸用、大腸用、食道用などのカプセル内視鏡が次々に開発され、日本でも2007年に小腸カプセル内視鏡が保険診療で患者さんに施行できるようになりました。2014年1月からは大腸カプセル内視鏡も施行できるようになり、消化管の検診がカプセル内視鏡に託される新たな時代となってきたのです(図1)。

カプセル内視鏡検査の実際

カプセル内視鏡検査が、最も有用なのがスコープが挿入しにくい小腸の検査です。小腸はかつて『暗黒大陸』とも呼ばれていましたが、カプセル内視鏡の登場によってこれまで明らかでなかった小腸の病気の様々な姿が明らかになってきました(図2)。

カプセルはディスポーザブル(使い捨て)で、朝食をとらずに11×26mmのカプセル内視鏡を水とともに内服します。消化管内の写真を1秒間2~6枚ずつ撮影し体外に装着したデータレコーダーへ無線で画像情報を送り録画し、膨大なデータはコンピューター上で解析をします。

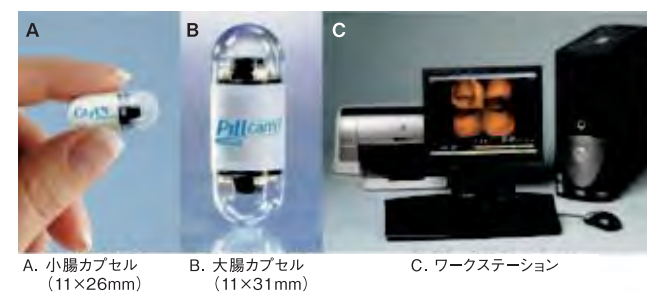
2014年1月から、大腸カプセル内視鏡が日本でも保険診療可能となり、浜松医科大学では全国に先駆けて検査を行っています。これまで大腸癌検診の精密検査は、肛門から挿入するスコープの苦痛やはずかしさなどの精神的苦痛もあり、受診率が必ずしも高くないのが現状でした。しかし、我が国の大腸がんの癌死亡率は

男性で3位、女性では1位であり、その克服は国民的課題です。大腸カプセル内視鏡検査は、下剤による腸管洗浄が検査前に必要で、液体腸管洗浄剤を内服して十分な洗浄が得られたらカプセルを内服します。大腸カプセル内視鏡は図1Bの写真のごとく両端にカメラを有し、1秒間4~35枚の超高速撮影を可能としたハイテク機器です。大腸癌の早期発見に寄与することが期待されています。

今後の展望

カプセル内視鏡は登場したばかりの歴史の浅い検査ですが、機器の進歩は著しく観察時間の延長、解像度や撮影枚数の自動制御、リアルタイム画像確認など次々に新たな機能を備えてより良い検査が行えるようになってきています。現在は観察することが目的ですが、消化管内を自在に動くことができ治療機能を備えた夢のようなカプセル内視鏡が登場する日も、そう遠くはないのかもしれませんが。

図1 小腸カプセル内視鏡と大腸カプセル内視鏡(COVIDIEN社)



A. 小腸カプセル (11×26mm) B. 大腸カプセル (11×31mm) C. ワークステーション

~小腸カプセル内視鏡で明らかとなった小腸疾患~
当院における原因不明の消化管出血の最終診断

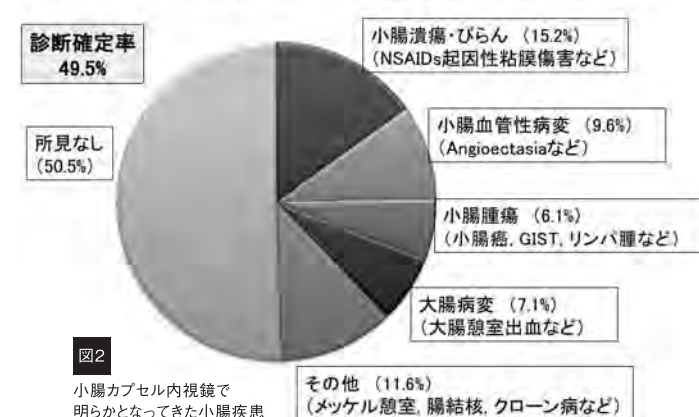


図2 小腸カプセル内視鏡で明らかとなった小腸疾患

—”OSCE”と”新臨床研修制度”：初ものづくしの日々—



麻酔・蘇生学講座 教授
佐藤 重仁

’98年に本学へ赴任し’99年に初代OSCE(オスケー)実行委員長を命ぜられました。ほとんどの教官がOSCEの意味が判らない頃で、「OSCEとはなんぞや?」と資料を抱えて夏休みを消費しました。翌2000年、外来診察室をステーションに仕立て、多くの方々のご協力を頂き、本学で初めてのOSCE開催にこぎつけました。’04年から始まる新臨床研修制度にそなえ、初代臨床研修センター長を拝命しました。「マッチングとはなんぞや?」と聞きなれない単語と仕組みの理解に苦労しました。また各診療科の思惑が絡んだ研修プログラムを完成させ、’04年4月には初めての初期

臨床研修医64名を受け入れました。制度開始当初は指導する方も初めて、される方も初めてでしばしばトラブルがおきました。研修医の存在自体が病院のステータスになった現在ですが、「教育が嫌で市中病院に出た私がなぜ指導をするのか?」、「卒業大学の後輩でもない研修医を私がなぜ指導するのか?」などの苦情が聞かれました。この時点で臨床研修病院の「勝ち組」、「負け組」が決まり、それは現在でも尾を引いているようです。初ものづくしで貴重な経験をさせていただきました。

道半ばですが感謝を込めて



腫瘍センター 教授
大西 一功

平成5年7月に着任以来、22年にわたり浜松医大では大変お世話になりました。この間、様々な経験をさせていただき多くの事を学ばせていただきました。赴任当時まだ若々しかった医大では伸び伸びと仕事できました。以前よりJCOG臨床試験に係わってきましたが、血液内科では大野竜三前教授のもとJALSGにおいて本格的に白血病の臨床研究に携わらせていただきました。その中でエビデンスを自分達で作る事の重要性、生物統計の厳密な手法を学ぶ事ができ、「造血器腫瘍診療ガイドライン」作成の際にも大変役に立ちました。

後半の10年はがん対策基本法制定に伴うがん診療の基盤整備に携わらせていただきました。病院では外来化学療法センターの開設、地域がん診療連携拠点病院事業、大学ではがんプロフェッショナル養成プランの実施、臨床腫瘍学講座の開設など、新しいプロジェクトに取り組む事には何にも増してやりがいを感じました。しかしまだ道半ばで、それを発展、維持していく事の難しさも実感しております。こうした事が何とかできたのも第三内科および診療科・職種横断的ながん診療の実現に向けた多くの方々のご支援とご協力の賜物と思います。心よりお礼を申し上げます。

放下着



医化学講座 助教
佐藤 英二

「告別式だと思ってやってみろ」(中井準之助元学長の口癖)に従って述べよう。書かれたものに何かあるのではなく、書かれないものに意味がある。西洋は「はじめに言葉ありき」、東洋は「不立文字」、言葉を使うことは所詮「不確定性原理」がつきまとう。この「絶対矛盾」をどうするかは自分の頭の中しかない。頭の中に引っかかった言葉はいくつもある。例えば、学生時代の大学紛争スローガン「産学協同反対」は当時から何かおかしいと思った。が、昨今の「産学連携」もあやしい。大学は「特別」なところと言ってしまうとおしまいか。「学道の人はすべからず貧なるべし」

が本来なので、それを強いられても平気だった。細胞を造ったヒトはいない、だから同じところをグルグル回っているので「ピリが先頭に立つ」ことの夢を見ている。「インパクトファクター」という幻を利用する「だまし」が好きらしい。「だまし」「だまされる」ことが好きらしい。「あなたにとってインパクトとは何ですか」だけである。家内に自虐的な文は止めてほしいと言われていたが、今回もそうだった。

低空飛行も終了だ、有り難いことだ。地元、浜松医科大学に奉職(35年6ヶ月)できて良かった。

裏方の業務を行って・・・

平成3年から浜松医科大学に勤務し、教職員・学生のみなさんの排出した廃水・廃液・ゴミを、法令に適合するように管理し処分してきました。みなさんの使用している流しやゴミ箱の先には私がいました。その中で私の在職中でも、廃水処理装置の改修、廃液処理の学内処理から業者委託処理への変更、現学長の中村先生の指示でのゴミ分別のイラスト作成、一般的な廃水処理装置では有害物質を除去できないチメロサル・カコジル酸・オスミウムなど廃液への取り組み、法人化後は衛生工学衛生管理者としての巡視などの、変革があり、苦心しました。また、様々の

方と関わりご教示いただくとともに、学内ではコジュケイ、サル、リス、アオサギ、ハヤブサ、タマシ、イモリなども出会いました。

この原稿を書いている時点では4月からの仕事は決まっておりませんが、どこかでお会いしたときには、声でもかけていただくと嬉しいのですが。

組織は人で動いていると思います。今年の夏になったら大学の南側は草だらけかも。



技術部 技術専門員
鈴木 一成

基礎研究棟に39年

昭和51年5月一般教育実験系技術職員として採用された。その頃の半田山は木々のなか工事用の土があらこちらを覆っていた。附属病院はまだなく、東側だけができた基礎研究棟の真新しい研究室に踏み入れた。泥だらけの靴で汚さないように云われ、机・椅子や実験器具を講義実習棟から研究棟8階へ運ぶのが最初の仕事であった。8階共同事務室に居室も決まり、南窓からはさすがに中田島にあがる風や光る遠州灘が見えた。

昭和51年は開学間もない時期であり、医学科2期生と3期生を同じ年に一般教育の生物・物理・化学

実習を行なった。8階の先生方からは生物化学の実験手法・知識や研究姿勢を多方面にわたり教わり、その後の仕事に大変役立った。

昭和60年からはB1階の機器センターに移り、大型機器の依頼分析やペプチド合成、中小分析機器の管理・運用を行い、さらに研究者の方々との共同研究も行なうことが出来た。当初基礎研究棟の各研究室にいた技術職員は激減し、教員が任期制になるなか、パーマメントの技術職員の職務内容・役割も変わりつつある。教員・研究者から求められる技術職員像も多様であり変化して来ている。



技術部 技術専門員
藤江 三千男

37年間に会った方々へ感謝

昭和52年12月、麻酔学教室の文部技官として採用されてから37年が過ぎました。

麻酔学の池田和之教授が手術部長を兼任されていたので、採用当初の仕事は手術部内に設けられた検査室の整備でした。目新しいことがいっぱい、仕事に行くのが楽しみな毎日でした。昭和53年の第25回日本麻酔科学会の時、今と違い手書きの原稿や表グラフをスライドにするため皆で徹夜の準備をした思い出があります。この年1期生の臨床実習が始まりました。以降、ME検査の方達と共に仕事をしつつ、徐々に医局関連の仕事を中心にすようになり、国際学会の主催や新しく発

足させた学会の事務局運営などに携わる経験をしました。そして平成10年佐藤重仁教授が赴任されてから、高機能シミュレータを使った臨床実習のオペレータというとても面白い、大学ならではの仕事をすることができました。平成24年4月に新設の医学教育推進センターへ異動し、学生教育に係わるようになり、35年目にして初めて大学に勤務しているという実感を持ちました。

こうして振り返って思うことは、37年を通して心良き方々との出会いに恵まれたということです。その方々の御蔭で無事に定年を迎えることができたことに感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有難うございました。



技術部 技術専門職員
小楠 敏代

記憶に残る仕事に感謝



副病院長・看護部長
桑原 弓枝

私が看護師を目指した時代(昭和50年前後)は、看護師不足が今と同様に社会問題となり「女性も手に職をつけて働く時代」と言われ始めた頃でした。白衣の天使に憧れたわけではなく、女性も男性と対等に社会で生き生きと仕事をするに夢を描いておりました。

出身地である浜松市内の総合病院で5年間看護師として働く中で、まだ未熟な故に、患者さんの人生や死を受け止めきれず、1年間医療から離れたことがありました。その1年間で、定年退職まで働き続けることの、エネルギーの源であったと振り返ります。その後、上京して大学病院に勤め、様々な役割を与えていただきました。その中で学んだことは、一生懸命に誠実に患者

中心の医療を考え行動していれば、結果も評価も必ずついてくるということです。

浜松医科大学医学部附属病院に着任したのは、平成16年の国立大学法人化の年でした。看護部長として変革の時代に何ができるのか、この大学病院の良さを強みに変えていきたいという一心で、この11年間過ごしてきました。悩んだり、喜んだり、感動したりと、これほど自分の感情の振れが大きかった職場はありません。その間、看護部職員の一致団結の力で様々な事業に取り組み、看護師が集まる病院になったことは、定年退職を迎えるにあたり、この上ない喜びであります。記憶に残る仕事をさせていただいた皆様に、心から感謝申し上げます。

半田山の植物に心癒されて



看護部 看護助手
袴田 富子

一般事務から浜松医科大学に転職し37年あまり、月日の過つのは早いものです。たくさんの上司や同僚、先生、そして患者さんとの出会い、貴重な体験ができたことに感謝しております。

私は花が好きだったので、自然を残したこの半田山の職場が好きでした。園芸クラブに参加し、なおいっそう草や木に興味を持つようになりました。大学や図書館周りの緑の木々、何種類もの椿の美しさを目にしました。椿は日本が北限だご存知でしょうか。宿舍の近くのエゴの木はとても大きく、毎年たくさんの花を咲かせます。後にはすずなりの実をつけます。こする

と泡が出るそうなので試したいのですが、手が届かず残念です。桜の種類も多く、春には次々と花が咲きます。去年は中庭に河津桜と里桜が植えられました。

朝夕、木々を眺め、心安らぐ毎日でした。これからも緑多き浜松医科大学でありますように願います。

振り返って想う事



栄養部 調理師長
銭袋 政勝

早いもので本学に赴任し37年が経とうとしております。昭和53年4月医事課給食係に採用され本年3月に無事定年退職を迎える事となりました。

採用当時は病院給食経験者が少なく、厨房業務すべてを調理師が行っており、日々多忙だったことが印象に残っております。数年が過ぎ職員退職により定員減となり、欠員の補充がなく、部分的に委託が進みました。職員と委託スタッフとの間での様々な問題が起き苦慮したことを忘れられません。その後、平成21年4月の選択メニュー開始に伴い、メニューの制作や試作に携わり実施出来た事は良い経験になりました。

平成21年12月に新病棟移転に伴い、厨房の業務もセンターキッチン、中央配膳からサテライトキッチン、病棟配膳に変わり、調理もクックサーブから新調理システム(真空調理、クックチル)に変え、移転準備も順調に進み、無事終わった事は、今でも鮮明に蘇ってきます。新しい業務も軌道にのり、平成25年には本学で「第27回全国国立大学病院栄養部門調理師連絡協議会」が開催され、全力で取り組む事が出来、貴重な体験をしました。

最後に浜松医科大学の益々の発展を祈願しております。お世話になった皆様へ感謝申し上げます。

新任職員の紹介

New Staff Introduction



総合人間科学講座(化学) 准教授 黒野 暢仁

平成26年9月1日付で総合人間科学講座(化学)准教授を拝命しました。

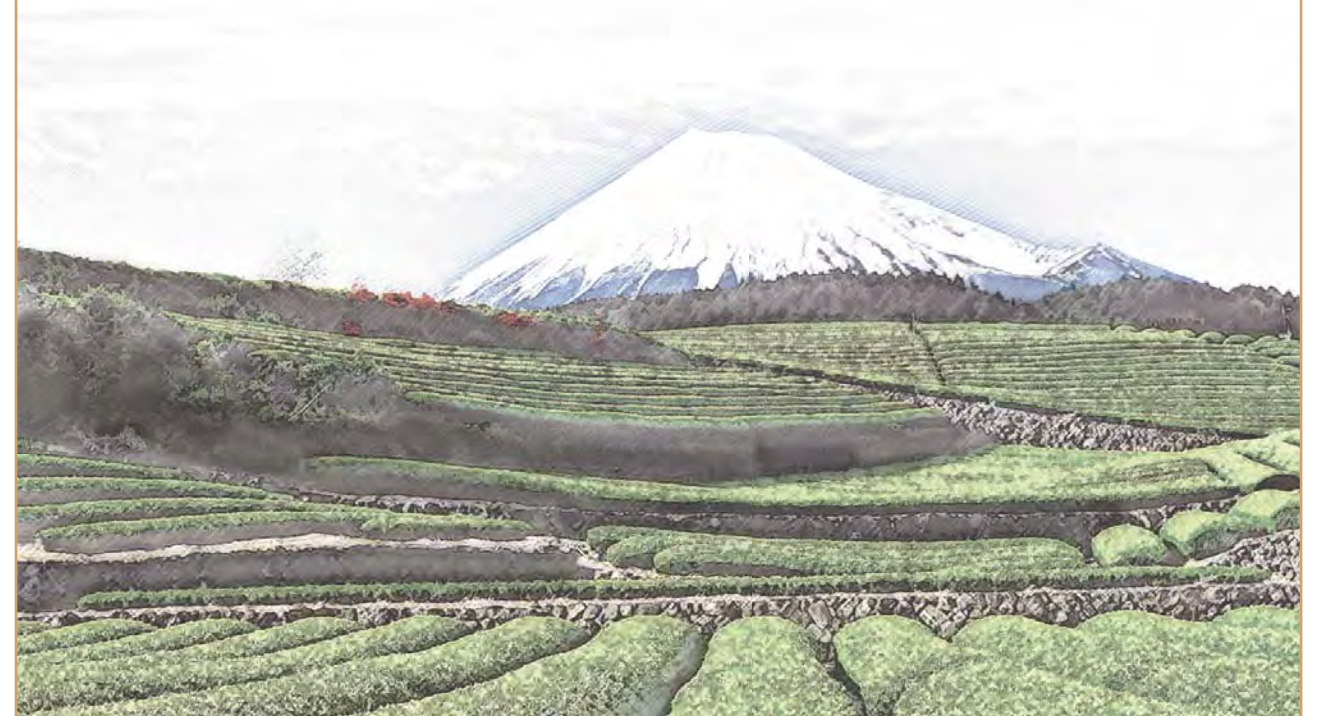
私は愛知県岡崎市出身で高校を卒業した後北海道大学で学生・職員として約20年過ごしました。そして、この夏の終わりから浜松に移り、札幌での生活が長かったせいも、気候や風土の違い(10月の日射しの強さ、11月も碧々とみえる山々、富士山が見えるなど)に改めて新鮮さを感じながら、新生活をスタートさせました。また、通勤途中、緑の中に橙色が映えるミカン畑、日光が反射してまぶしい浜名湖でも本学に着任したことを実感しました。

専門分野は有機合成化学です。前任地では不斉中心炭素をもつ化合物の合成研究や効率のかつ選択的合成を実現する触媒の

開発研究を行っていました。また、着任前の1年半はドイツのマックス・プランク研究所にて、酸素の酸化力を活用した炭素-炭素結合生成反応の開発に携わってきました。現在は、これまでの知見・経験に本学の特色を融合させた新しい研究課題を模索しています。

一方、教育活動では有機化学分野の講義等を担当しています。かなりの部分が系統化された分野ですが、その内容は膨大ですので、エッセンスを説明しながら、1人でも多くの学生に「理解・活用できた時の楽しさ」を感じてもらうことを目指しています。

まだ赴任して間もなく、至らない点もありますが、ご指導・ご鞭撻のほど、よろしく願いたします。



ロンドン大学 セントジョージ校での1ヶ月



医学部医学科6年
森田 真知子



一緒に実習した仲間と記念撮影 ロンドン大学セントジョージ校付属病院

実習では、循環器を4週間回らせていただきました。実習中は経皮的冠動脈形成術 (PCI) や心臓外科の手術 (CABG、TAVI) を見学してもらいましたが、見学中は看護師や放射線技師の方はとても優しくまたアカデミックで、手技の手順や目的など細かく丁寧に教えて頂きました。担当の先生も、手技が終わると解説して下さいました。その際は、必ず始めに私に画像を読ませてどう思うか、どの動脈が異常か、なぜそう思うのかなどの質問があり、しっかりと学生に考える時間を持たせてから説明して下さいました。外来では、先生は患者さんと世間話をするなど時間をしっかりと、患者さんとの壁が少なく、見学の学生も会話に混じり、患者さんが自分の症状を伝えやすい環境だと思っています。時間が空いたときは、病棟で診察実習をしていました。診察実習では、身体所見、病歴聴取だけでなく、鑑別診断、鑑別するために行なう検査、その後の治療などの管理方法までしっかりと考えなければならずとても苦戦しましたが、同時にとても勉強になりました。病棟にいる患者さんなら誰でも診察実習できたので、さまざまな症例を経験することができとても新鮮でした。またベッドサイドでの実践的レクチャーでは、身体所見取りを実際の患者さんに対して行い、自分が取った所見、そこからあげられる鑑別診断を先生に発表、

それを先生が評価しフィードバックをもらえ、とても貴重な時間でした。いままでは全ての身体所見をルーティンワークのように取ってから診断を付けるという状況でしたが、このベッドサイドでの実践的レクチャーでは、診察をしている最中には、何を見ているのかなど様々な質問が飛んでくるので、しっかりと考えながら診察しないと意味がないということに今一度気づかされたとともに、今までの自分の診察の仕方を反省しました。

今回留学をさせて頂き、日本での実習だけでは学べなかったことを学ぶことができました。診察時の目的意識、患者さんとの関わり方、実習への態度など、今一度見つめ直すべきところが多く見付き、学びの多い4週間でした。診察実習をたくさん取らせていただき、日本の実習では患者さんと直に接する機会が少ないので、とても貴重な経験となりました。ルーティンワークとなっていた私の身体所見の取り方では、何も患者さんから学べていないということに気づくことができました。一つの診察を十分に意味を考えて取ること、鑑別を考えながら取ること、基本的でありながら今まで忘れがちだったことを、今一度確認することが出来ました。患者さんが一番の教科書だということを忘れず、実際の教科書だけでなく、しっかりと患者さんと向き合っていきたいと思います。また、積極性の

低学年のときに先輩の話を留学報告会で聞いてからずっと憧れていた、医学教育振興財団によるイギリスでの実習プログラム。IELTSや英語での臨床的な質疑応答も含めた面接などを乗り越え、晴れてロンドン大学セントジョージ校にて3月に臨床実習をさせていただきました。



カテール室で担当の先生と

大切さも実感しました。空き時間に図書館に行くのもいいですが、多くの症例を見たいと先生にアピールし、病棟をふらついていると、先生や看護師さんも勉強になる症例があると声を掛けてくれて、多くの症例を経験する事が出来ました。受動的ではなく能動的であることの大切さを感じた実習でした。今回学んだことを忘れず、一層勉学に励み、来年から始まる研修医生活にも役立てていきたいと思っています。



友達とロンドン観光

また、土日にはせっかくのお休みなので、できる限り観光をしたり現地の友達と遊びにいたりしました。ロンドンから遠出はしませんでした。ウェストミンスター寺院、ビッグベン、セントポール寺院など、ロンドンだけでも数えきれない観光地があります。平日はみっちり実習、土日は観光と、メリハリ付けて充実した1ヶ月となりました。

今回このような貴重な体験をできる実習を紹介していただき、選考合格まで支えてくださった方々に感謝します。また、これからも後輩たちが続いてくれたら嬉しく思います。

海のむこうで

Beyond the Seas

モンゴルで インタビュー調査を行って



地域看護学講座 助教
水田 明子

い出すきっかけがありました。私は、健康社会医学講座の博士課程で子どものメンタルヘルスに関する研究をしています。尾島俊之教授から、特任助教であった徳本史郎先生が現在、在モンゴル日本国大使館の医務官をされているとお聞きし、モンゴルの子どもの現状を知りたいという思いに駆られました。そこで、徳本史郎先生にモンゴル国立教育大学教育学・教授法学部長のオドゲレル教授をご紹介いただき、モンゴルの教育事情についてご教授いただく機会を得ることができました。



古川真規子保健師(右)と筆者(左)

2014年9月に、モンゴルの教育関係者、障がい児親の会代表、視覚障がいのある母親とJICA青年海外協力隊のスキームで派遣された保健師へインタビュー調査を行いましたのでご報告します。

モンゴルには、遊牧民の英雄チンギス・ハーンと伝統的な格闘技モンゴル相撲から、雄大な自然の中で力強く生き、独自の文化を葆ち発展している国という印象があります。最近では、昨年9月場所の逸ノ城の快進撃や、歴代最多33回の優勝を果たした白鵬の活躍が感動を呼びました。と同時に、私には忘れられない映像があります。十数年前にNHKのドキュメンタリーで見たマンホールで生活するストリートチルドレンです。零下30°Cの冬、10代半ばの少女がマンホールの中で赤ちゃんを一人で産み育てるという内容で、「罪を犯したとしても自分の子どもを守りたい」という言葉にとっても衝撃を受けました。時間と共に記憶は薄らいでいましたが、昨年、鮮明に思

生と共同で調査を行うことになりました。私は大学院のセミナーで、ソーシャル・キャピタルという概念を知りとても感銘を受けました。それは、「人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率を高めることのできる「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴」と定義されています。モンゴルの家族や地域の強い繋がりが、子どものソーシャル・キャピタルは何かを学びたいと思います。



最終日にウランバートルから車で1時間ほどのテレグジまでキャンプへ行きました。道中、松の実を売る少女。

モンゴル人の平均寿命は65歳で、高齢者の定義は男性が60歳、女性が55歳以上です。モンゴルに保健師という職種はありませんが、モンゴルのNGOやJICA保健師が公衆衛生活動に取り組んでいます。保健師は、全てのライフステージにある人々を対象とし、健康に問題を抱えながら地域で生活する対象者とその家族を含めた支援を行います。この保健師活動の視点を、共同研究に活かしたいと思います。モンゴルでの調査にご指導、ご協力をいただいた皆様に心から感謝申し上げます。



貧困層が暮らす地区



富裕層が暮らす地区

助産師養成コースが 専攻科から修士課程に変わります

本学では、1年課程の助産学専攻科を廃止し、平成27年4月から大学院医学系研究科看護学専攻(修士課程)に2年制の助産師養成コースを開設いたします。

本学助産師養成コースでは、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ(性と生殖に関する健康と権利)を基盤とした教育を行います。母子とその家族や地域の人々に寄り添い、いかなる対象のニーズにも応え得る高度な診断能力及び科学的根拠に基づい

た質の高い実践能力、研究能力、教育力を身につけることにより、マネジメント力を培い、地域の周産期医療の充実、国際的視野を持って母子保健の発展に貢献できる指導的役割を担える人材の育成を目指します。

大学院の2年間で、助産学の知識・技術と共にソーシャルスキルを身につけ、様々な対象と関わる実習を通して「人へのケア」を強化し、ハイリスクにも対応できる

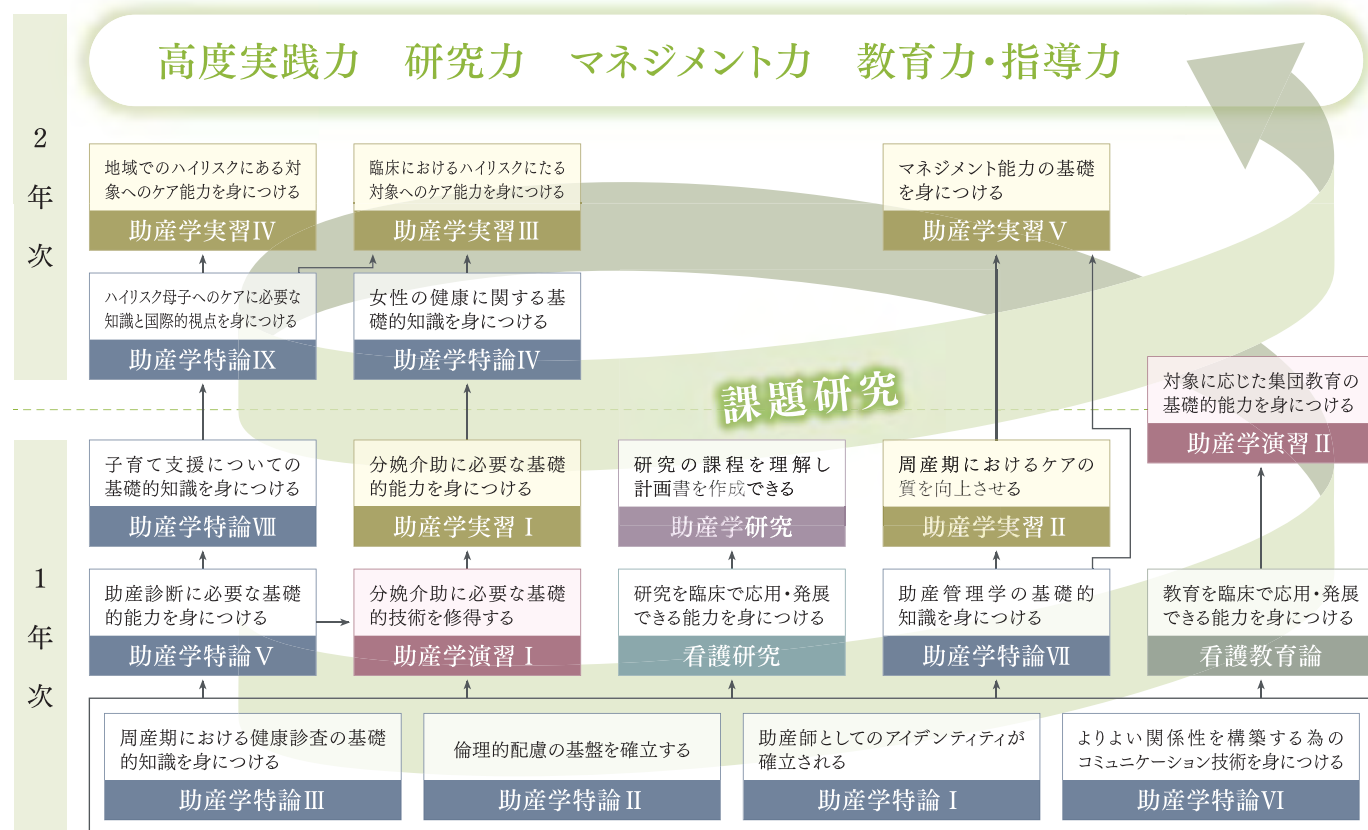
高度な実践力を養います。そして、人を教育・指導する力とこれからの母子へのケアや助産師としての質の向上を目指す研究力を培い、実践していくことができる人材を育成します。

修了後は、修士(看護学)の学位が授与され、助産師国家試験の受験資格が得られます。

カリキュラムの特徴

1年次に助産師として必要な基礎的能力を身につけるとともに、共通科目の看護学研究を履修し研究のための基礎的能力を身につけます。全ての科目の中で問題意識を持って取り組むことで、自らの課題の明確化及び研究の必要性について学びます。課題研究の計画書作成から計画の実施及び評価・考察を通して論文を作成する中で、高度実践力、研究力、マネジメント力、教育力・指導力の統合を図ります。必修単位の半数を演習(助産技術・健康教育)及び実習に費やしており、実践力が強化できるカリキュラムとなっています。

指導的立場の助産師養成



PRIZE WINNERS

学会賞等受賞

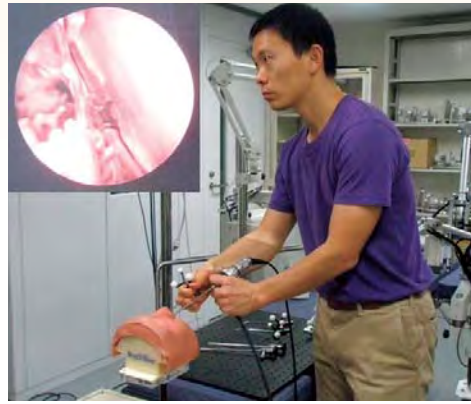


賞の名称	受賞者	受賞年月日	受賞内容(研究題目)
第48回日本小児内分泌学会学術集会最優秀演題賞	小児科学講座 特任研究員 永田 絵子	平成26年 9月26日	BHLHA9を含む約200kbの同一領域の日本人創始者コピー数増加は四肢形成不全発症の顕著な感受性因子である
日本病院薬剤師会第2回江口記念がん優秀論文賞	薬剤部 副薬剤部長 堀 雄史	平成26年 9月26日	Changes in compliance with Japanese anti-emetic guideline for chemotherapy-induced nausea and vomiting: a nationwide survey-using a distributed research network
日本病院薬剤師会学術奨励賞	薬剤部 薬剤師 石田 卓矢	平成26年 9月26日	日本における製薬企業による医療用医薬品の自主回収の実態調査
日本医療薬学会 Postdoctoral Award	薬剤部 薬剤師 田代 将貴	平成26年 9月28日	オピオイド鎮痛薬投与がん患者におけるプロクロルペラジンの薬物動態学および薬力学的臨床研究
Hans G Borst Award for Thoracic Aortic Surgery, 28th European Association for Cardio-Thoracic Surgery Annual Meeting	大学院医学系研究科(博士課程)2年 外科学第一講座 津田 和政	平成26年 10月14日	Transesophageal spinal cord stimulation for motor evoked potentials monitoring: feasibility, safety and stability
第41回日本神経内分泌学会学術集会若手研究奨励賞	大学院医学系研究科(博士課程)3年 内科学第二講座 柿沢 圭亮	平成26年 11月1日	GAD67-GFPノックインマウスを用いたCRHニューロン制御におけるGABAの役割についての検討
第19回静岡健康・長寿学術フォーラムポスター賞優秀賞	医学部医学科4年 山崎 智幸	平成26年 11月7日	Development and evaluation of endoscopic navigation based on simple 3D measurements using a stereo camera
第19回静岡健康・長寿学術フォーラムポスター賞優秀賞	医学部医学科5年 田中 信太郎	平成26年 11月7日	Insect pest control by the innovative light traps based on our new findings of the behavioral mechanism in phototaxis
第51回日本小児アレルギー学会最優秀演題賞	小児科 医師 安岡 竜平	平成26年 11月8日	フィラグリン遺伝子変異を有する小児アトピー性皮膚炎の臨床的特徴に関する検討
第7回J-FD研究会学術集会 優秀演題	小児外科 特任准教授 川原 央好	平成26年 11月8日	胃食道逆流の病因としての胃排出遅延の意義についての検討
第7回臨床薬理研究振興財団 研究大賞	薬剤部 薬剤主任 見野 靖晃	平成26年 11月11日	全身性エリテマトーデスにおけるイノシンーリン酸脱水素酵素活性評価の有用性
第25回臨床薬理研究振興財団賞 学術論文賞	臨床薬理学講座 准教授 乾 直輝	平成26年 12月4日	Chronological effects of rifampicin discontinuation on cytochrome P450 activity in healthy Japanese volunteers, using the cocktail method

本学学生2名が第19回静岡県健康・長寿学術フォーラムでポスター賞を受賞しました

11月7日・8日に開催された第19回静岡県健康・長寿フォーラム(沼津市)には県内外から延べ約1,112名が参加し、健康長寿社会の構築に関する最新の学術研究成果の発表が行われました。ポスターセッションでは、県内の大学、大学院、工業高等専門

学校、病院等から、若手研究者を中心に熱心なセッションが繰り広げられ、69件のポスター発表のうち優秀賞10件が表彰されました。学部学生が受賞したのは本学のみで、本学学生のやる気とポテンシャルの高さが示された嬉しいニュースとなりました。



内視鏡画像(左上)を見ながら模擬手術

2013年4月。3年生になった私は焦りを感じていました。2年生後期に編入学して勉強も落ち着いてきましたが、医師になってから働ける期間は同級生よりも短く、それは患者さんから学べる期間が少ないということです。その分を理工系出身の知識で補えないか、何かできることはないか、そんな気持ちもあって、4月下旬にメディカルフォトリニクス研究センターの山本先生を訪ねました。

その時に紹介して頂いた手術ナビゲーションシステムに興味を持ち、お手伝いさせて頂くことになりました。研究室では副鼻腔内視鏡手術のナビゲーションシステムの小型化・低価格化の研究・開発がなされており、私はモデル人形で模擬手術を行いナビゲーションシステムの実力評価を行うことにしました。

本格的に取りかかったのは昨年1月の基礎配属*が始まってからでした。共同研究の株式会社ゾディアック様からお借りしたカメラを使って人形とその鼻腔に挿入された器具を撮影し、CT画面上に器具の先端が正確に表示されるのをチェックしました。手術は内視鏡画面を基に行われますが、ナビゲーションシステムはカーナビのように器具先端の位置から見える人体内の景色を見せてくれます。ナビゲーションがあれば便利ですが、導入しやすさや使い勝手に課題があり、小型化・低価格化が研究の狙いでした。そこで「ノートパソコン+カメラ」という簡単な構成でど

副鼻腔内視鏡ナビゲーションのポスター発表までの軌跡

医学部医学科4年 山崎 智幸

こまでの性能が出るのかを評価しました。

ちょうど測定のコツが分かってきた頃のこと、妊娠中の妻が出産しました。予定日よりやや早かったため、NICUのある浜松医科大学病院でお世話になりました。インキュベーターに入った赤ちゃんは小さかったけれど、しっかりとミルクを飲んでいました。たくさんのモニターに囲まれた我が子を見て医療の進歩の大切さを改めて感じました。3時間おきにミルクが必要で、研究室と病棟を往復する日が20日ほど続きました。データを取って授乳、データをまとめて授乳。ゾディアック様とも擦り合わせを行い、なんとか2月末には利用可能な位置精度が出ていることを確認できました。

その後9月になり、山本先生から静岡県健康・長寿フォーラムでの発表を勧めて頂きました。基礎配属で行った内容を中心に開発されたナビゲーションシステムの説明をしました。国内外の多くの方に知って頂こうと懸命に発表し、ポスター賞まで頂くことになりました。赤ちゃんはすっかり大きくなり、今ではつかまり立ちができるくらいに成長しています。体験してきたことを生かし、良き医療人となるよう引き続き努力したいと思います。

ご指導頂いた山本先生、家族、関係者の皆様に改めて感謝いたします。

*3年生の1月中旬より2か月程度行われる研究室体験の授業



内視鏡操作(上)とCT画像例(下)



ナビゲーションシステムの構成

指導教員からのメッセージ -Congratulatory Message-

山崎智幸君の研究とポスター発表を指導して

メディカルフォトリニクス研究センターイノベーション光医学研究室 教授 山本 清二

優秀賞を受賞した研究は、カーナビのように地図(手術前に撮影したコンピュータ断層画像)に内視鏡手術をしている場所を示してくれる手術ナビゲーションを2台のカメラとノートパソコンでシンプルに実現する実用的な研究開発成果です。山崎君は理工系出身というバックグラウンドを持ったヤル気ある学生で、少しでも医療に理工系の知識と経験を活かさないかという希望があり、光技術を活用した医療機

器開発を行っている私の研究室に基礎配属で来てくれました。山崎君は共同研究企業の人たちとも良好な関係を築き、学部でここまで立派に研究してくれる人を見たのは自分にとってもフレッシュな経験で、楽しませてもらいました。研究マインドを持った「いいお医者さん」として、山崎君がより一層成長してくれることを期待しています。

一流の環境で学ぶということ

医学部医学科5年 田中 信太郎

「学問をしたい」、そう思って私は2年生の冬に生物学の針山孝彦教授の部屋を訪れました。当時は解剖学実習の直後で暗記による勉強の反動もあったと思うのですが、もっと考えたい、もっとワクワクしたいという衝動に駆られた故の行動でした。なぜ生物学の教室を選んだのかとよく聞かれますが、針山先生が魅力的な先生だったからです。先生の講義は、生物学の知識を教えるのではなく、生物学という学問を通じて自分の世界観を学生に語ってくれるという、まるで哲学のような講義だったと今でも記憶しています。半ば衝動的に生物学教室を訪れた私ですが、生物学教室の先生方のご厚意により学ぶ機会をいただき、これまでの3年間、特任助教である弘中満太郎先生が中心となられている昆虫行動学チームの一員として日々研鑽を積ませていただいております。

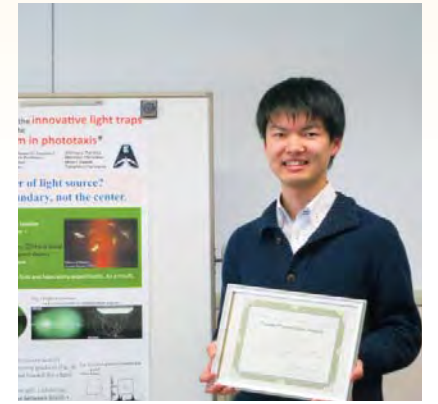
昨年11月に受賞した「第19回静岡県健康・長寿学術フォーラム ポスター賞優秀賞」もその研究の中でいただいたものです。これまでも学会やビジネスフェアなどで研究成果発表を行ってききましたが、今回は英語での発表ということもあり、受賞を大変嬉しく思っております。本フォーラムでは、昆虫が光に誘引される走光性という

現象に関して、昆虫が光源と背景の境界(エッジ)に引き寄せられることを世界で初めて発見し、この現象を光捕虫器などに利用することで衛生害虫を含むさまざまな昆虫の行動を強力に制御できる可能性があることを報告しました。ポスター賞には、発表内容に対する評価に加えて今後の活動に対する期待も含まれていると思いますので、一層の努力を重ねていきたいと思っております。



昆虫は光源のエッジに向かって飛んでいく

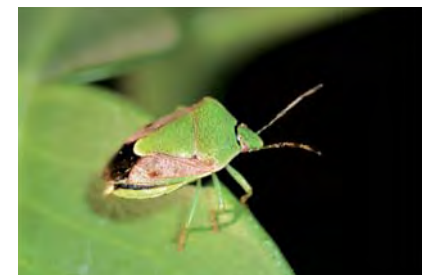
さて、研究室の一員として仕事を振り返ってみると、研究計画の立案、科学的データに基づく議論、学会発表、論文執筆、企業との契約交渉・共同開発、企業へのプレゼンテーション、チーム内での信頼関係の構築など、私が得てきた経験はかけがえのないものであり、全てが今後の自分に役立つと思われます。私は、研究室



優秀賞を受賞したポスターと一緒に

に数年間正式に所属して、自らの成長と結果を求められるという厳しい立場で研究活動を行う制度を本学にも設けるなど、入学直後から一流の研究者がいる環境に身を置くことができる道もあるべきだと考えています。他領域の方と交流する機会が少ない医学部において、早い時期から様々な背景を持つ社会人と一緒に責任ある仕事をするには、多様な価値観を理解できる医師の養成につながるのではないのでしょうか。学生一人ひとりが自分あるいは社会に何が必要なのかを考えて時間を過ごす為には、研究室は最適な場所の一つだと思っております。

最後に、知識も経験もない自分に成長できる環境を与えて下さった針山先生や弘中先生に、感謝の意を表して本稿を閉じたいと思います。



相棒のチャバネアオカメムシ

指導教員からのメッセージ -Congratulatory Message-

田中信太郎君を指導して

総合人間科学講座(生物) 教授 針山 孝彦

田中君との出会いは生物学教室で地域貢献教育を行った時で、彼がまだ高校2年生の時でした。医学部生となった彼の研究テーマとして昆虫を材料にすることが最適なことか迷いましたが、ノーベル賞受賞者のA.クローグ氏の「医学研究には最適な生物を選ぶこと」という言葉のもと、昆虫の光に対する行動研究を行うことにしました。研究を共にした弘中満太郎氏の指導がよかったのか、彼はめきめき

と頭角を現し、自ら考えて実験を実施できるようになり、研究仲間や企業とも議論を続け独創性の高い研究となりました。さまざまな動物が生得的に獲得している走光性という、いわゆる「飛んで火に入る夏の虫」が単純に光に向かう行動ではないことを示したことは、特筆に値します。田中君が培ってきた研究手法の理解と科学観、そしてリサーチマインドを賞賛します。

10月

10月1日(水) 入学式



●医学部医学科第2年次後学期編入学入学式が行われ、5名が入学しました。
●大学院医学系研究科(博士課程)10月入学入学式が行われ、2名が入学しました。

10月3日(金) 地震防災訓練

東海地震の発生を想定した地震防災訓練を行い、教職員、学生が参加しました。



10月20日(月)

FD講演会

FD活動の一環として、臨床医学教育学講座 五十嵐寛特任准教授による「成果基盤型学習とそのデザイン～国際認証対応クニカルクラークシップ」と題した講演がありました。

10月23日(木) 解剖体慰霊祭

ご遺族、ご来賓、白菊会会員、新天会会員、教職員と学生約500名が参列し、解剖体慰霊祭を執り行いました。医学の発展のため、ご遺体を解剖に献体された故人の御霊に対し、ご冥福をお祈りしました。



10月27日(月) FD講演会

「定型的熟達者ではなく適応的熟達者を育成する授業～学習科学の理論に基づいた新たな授業と評価のかたち～」と題して、静岡大学大学院教育学研究科附属学習科学研究教育センター長 益川弘如准教授による学習科学の視点からの講演がありました。



10月30日(木)～31日(金)
外国人留学生実地研修旅行

外国人留学生と研究者を対象に、山梨・長野への研修旅行を実施しました。富士山周辺散策と諏訪大社参拝や時計作りを体験しました。

11月

11月1日(土) 学生表彰

課外活動、社会活動及び研究活動において、特に顕著な成績を収めた学生団体に対し、中村学長から表彰状を授与しました。

- 弓道部(男子) 第63回東海地区国立大学体育大会優勝
- 弓道部(女子) 第63回東海地区国立大学体育大会優勝
- 空手道部(女子) 第63回東海地区国立大学体育大会優勝
第66回西日本医科学学生総合体育大会優勝
- 四ツ葉 平成25年度浜松市青少年の表彰善行奨励賞受賞
- つながり 平成25年度浜松市青少年の表彰善行賞受賞

- 医学科2年 [寺澤 美晴、小野田 有希、岸 由梨、津崎 江美、大野 航、新貝 龍太郎、鈴木 堯大、高木 啓伍、南條 宏太、本間 侑、森 亘平]
第46回医学教育学会大会学生ポスターセッション優秀演題賞受賞



11月1日(土)～2日(日)
医大祭「彩」

医大祭実行委員会主催により第39回医大祭を実施しました。特別講演では聖隷三方原病院救急科医長 矢野賢一先生に「ドクターヘリと東海地震における医療体制について」をご講演いただきました。

11月6日(木)
医科学シンポジウム

第14回浜松医科学シンポジウムを開催し、学内研究プロジェクト採択者による講演を行いました。

- 岩城 孝行 准教授(薬理学)
- 藤山 俊晴 助教(皮膚科学)
- 村上 元 特任研究員(再生・感染病理学)
- 永田 絵子 特任研究員(小児科学)

11月12日(水) 消防訓練

附属病院4階東病棟から出火したことを想定して、消防訓練を行いました。



11月13日(木) 動物慰霊祭

動物慰霊塔前で、約80名の教職員が参列し、動物慰霊祭を挙行了しました。

11月19日(水) 永年勤続表彰式

永年勤続表彰式が執り行われ、教職員11名が勤続20年の永年勤続者表彰を受けました。

11月19日(水)

クリスマスイルミネーション点灯式

市内の民間企業5社の協賛によりクリスマスイルミネーションが点灯されました。



11月22日(土)

開学40周年記念式典

浜松市内において、開学40周年記念式典を挙行し、教育・医療関係者等約300人が出席しました。また、式典と同時にシンボルマークの発表と表彰式を行いました。式典終了後には、「いのちはだれのものか?」と題して、大谷大学教授・せんだいメディアテーク館長 鷲田清一先生による講演会を開催しました。



11月28日(金)

学生との意見交換会

学生自治会と各サークルの代表者を集めて「学生との意見交換会」を開催しました。

12月

12月19日(金) クリスマスコンサート

学生管弦楽団によるコンサートが行われ患者さんやご家族が集まりました。



12月26日(金)

看護学科卒業研究発表会

看護学科4年生による卒業研究発表会を行いました。

1月

1月23日(金)

共用試験医学系CBT

医学科4年生に、共用試験医学系CBTを実施しました。共用試験医学系CBTは、臨床実習開始前までに修得しておくべき医学的知識を評価する試験で、全国の大学で行われています。

2月

2月5日(木) 大学院修士課程(看護学専攻)公開研究発表会

修了予定の大学院生13名が、修士論文の研究発表を行いました。

2月10日(火)

個人情報保護管理者研修会

個人情報の適切な管理および取扱いについて理解を深めるため、総合人間科学講座(法学) 大磯義一郎教授による「国立大学法人職員における個人情報保護発展編」と題した研修会を実施しました。



2月21日(土) 共用試験医学系OSCE

医学科4年生に、共用試験医学系OSCEを実施しました。試験は実技で行われ、技能と態度が評価されます。

2月25日(水)～26日(木)

浜松医科大学入学者選抜試験

平成27年度浜松医科大学一般入試(前期日程)を実施しました。

囲碁将棋部

Go & Shogi

- 設立**
2009年
- 部員数**
9名
- 活動日程**
週3回(月・火・木)活動
- 受賞等**
2014年 中部学生将棋新人王戦 優勝
2014年 中部秋季個人戦 準優勝



医学部医学科2年
村田 一真

活動について

こんにちは、浜松医科大学囲碁将棋部です。私たちは週3回、福利施設棟2階和室にて主に昼休みに活動しています。本腰入れてバリバリ活動、というわけではなく、暇になった人が集まって将棋を指したりしていく気楽なスタイルで活動しています。それでも参加率は高く、和室に向かえば誰かはいるとい状況です。テスト前には活動内容が簡易勉強会になってしまうこともしばしば。ですので、部活に時間を取られたくない人、他に本業の部活がある人でも大歓迎です。先輩方もとても優しく、初心者の方でも快

入部することができました。

他の部活のように先輩後輩で上下関係ははっきりしている風ではなく、アットホームな雰囲気です。居心地の良い居場所となっています。

そして今年は将棋において超実力派の新入生を迎え、大会にも出場し、華々しい成績を飾ってくれています。彼との対局は得られるものが多く、とても勉強になります。格下である私にも丁寧に指してくれて、彼の指導のもと、練習を重ねて様々な大会に出場していこうと考えています。

経験者の方も、初心者の方も、浜松医科大学囲碁将棋部に興味のある方は、ぜひ和室に足を運んでください。

CLUB Introductions

サークル紹介

男子バスケットボール部

Men's Basketball

- 設立**
1974年
- 部員数**
約40名
- 活動日程**
週3回(火・木・土)練習
- 受賞等**
2014年 秋季東海医歯薬 ベスト4



医学部医学科3年
永野 牧郎

男子バスケットボール部の魅力

こんにちは、浜松医科大学男子バスケットボール部です。僕たち男子バスケットボール部は週3回、火曜木曜は19時~21時、土曜は15時~17時に練習を行っています。練習内容は基礎的な練習から試合形式まで幅広く練習しているので、バスケットボールの経験者はもちろん初心者の人も楽しく部活をしています。実際に、僕の学年では9人中6人が大学からバスケットボールを始めた人たちなので、大学に入って新しいスポーツをやってみようという人など大歓迎です。そのような人たちにも先輩が優しく丁寧に指導して

くださるので、僕の学年の初心者の人たちも今では試合に出ることができています。

僕がバスケットボール部に入部した理由は、バスケットボールの経験者だったというのももちろんありますが、部の雰囲気にひかれたというのが大きな理由となっています。バスケットボール部はまず人数がとても多く、良い先輩ばかりで、にぎやかな部活動です。またイベントごとなども多く、夏にはキャンプ、冬にはスノーボ旅行など楽しいイベントが目白押しです。そのイベントは女子バスケットボール部と合同で行うのでお盛り上がりと思います。

浜松医科大学の男子バスケットボール部に少しでも興味がある方は、気軽に体育館に足を運んでください。楽しみに待っています。

留学生の紹介

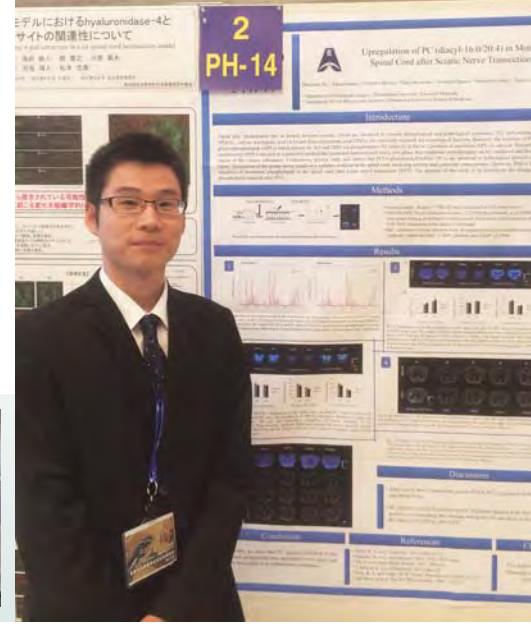
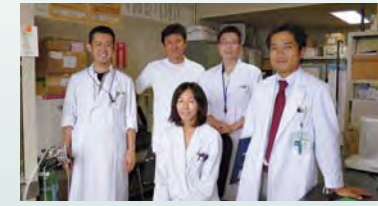
将来の夢は、今の研究を活かし、
自分の手で患者さんを健康にすることです。

International Student Introduction

大学院医学系研究科(博士課程)
2年 整形外科学講座

じょ とうびん
徐 冬閔

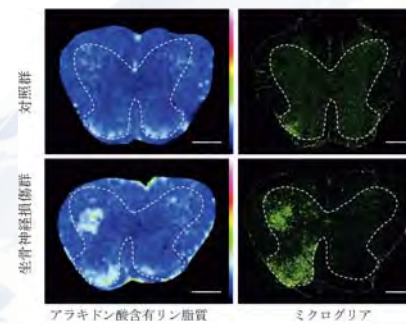
【出身国/地域】
中国福建省武夷山市



研究テーマ、 研究の成果を教えてください

私が行った研究は、マウスの坐骨神経損傷後脊髄内の脂質の変化の分析です。末梢神経とは、脳や脊髄から分かれた、体中に広がる神経です。坐骨神経損傷とは、末梢神経損傷の一つです。また、坐骨神経損傷動物の脊髄前角と後角及び脊髄神経節には様々な神経化学的な変化が生じることが知られています。

私は、坐骨神経損傷のモデルマウスを作り、3日、1週、4週の各時点で取り出した脊髄から、質量顕微鏡でリン脂質を解析しました。結果、坐骨神経損傷後脊髄前角と後角にアラキドン酸含有リン脂質が増加することがわかりました。さらに、アラキドン酸含有リン脂質が増える場所にミクログリアと言う細胞を発見しました。このことから、アラキドン酸含有リン脂質が増える事と、ミクログリアの高発現は関連していると考えられました。



アラキドン酸含有リン脂質 ミクログリア

日本に来るまでは 何を勉強していましたか?

私は2011年に福建医科大学を卒業しました。大学での研究テーマは南平市における肺結核の疫学の分析でした。南平市疾病予防管理センターに入り、臨床検査技師として、一年間検体検査についての仕事をしました。この間に、成人の血中鉛濃度による健康影響に関する研究のアシスタントをしました。

出身国(地域)は どんな様子ですか?

武夷山は中国福建省武夷山風景区と自然保護区を含んでおり、その中の風景区は周囲60平方キロにもわたります。その中で最も風光明媚な場所は九曲溪と言う所です。武夷山で最も有名な峰や切り立った断崖絶壁の洞窟に配置される神秘的な古代の棺桶群も、ここ九曲溪の近くに集まっています。気候もよく、「大紅袍(だいほんぼう)」と言われる美味しい茶の全国的な名産地としても知られています。是非一度、武夷山へお越しいただければ嬉しいです。

現在、中国の医学教育は主に五年制医学教育ですが、博士課程を含めての八年制精英医学教育もあります。中国の医学部学生は多いので、医学教育資源の不足が現在の医学教育における問題となっています。

浜松医科大学に来たきっかけ

福建医科大学では、予防医学を専門に勉強しました。しかし、勉強に励むうちに、医者になりたいという決意が心に芽生えました。特に日本の整形外科学に興味を持ち、臨床研究、基礎研究ともにレベルが高いといわれている浜松医科大学に入学したいと思い、留学申請書を提出しました。幸いなことに、松山教授は外国人である私に大変親身に接していただき、私が整形外科学講座で勉強することを同意していただきました。

浜松での生活はどうですか?

自分の出身地より浜松は温暖で住みやすいと思います。しかし、風は強いので、風の日に外に出かけるのは大変だと実感しています。日本に来た当初、一番大変なのは、言葉が伝わらない中、諸々の手続きを行わなければならないことでした。あの時、先輩やスタッフの方々は、大変親切に色々とお助けいただきました。おかげで現在実験をスムーズに行うことができているし、日本語も上達しました。英語がもっと上手になるように努力しなければならないと痛感しています。

最後に

浜松医科大学に留学できたことは人生の中でもとても重要な経験となっています。これからも身の回りにいらっしゃる方々への御恩を忘れずに頑張っていきたいと思っています。

Nursing café ‘和(なごみ)’を企画して

臨床看護学講座 教授
森 恵子

平成26年11月1～2日に行われた、浜松医科大学大学祭の中で、看護学科初めての企画、Nursing café ‘和’を開催しました。この企画発案の意図は、まず浜松医科大学病院の中で、一緒にチームを組んで医療を行う、医師、薬剤師、OT、PT、管理栄養士、そして療養中の患者の皆さん、大学の周辺にお住まいの方等々に、看護学科のこと、看護の仕事について、もっと知ってもらいたいということ、そして、看護学科への入学を希望して下さっている高校生の皆さんに、浜松医科大学医学部看護学科のことをもっと知ってもらいたいという2点からでした。

6月の終わりに看護学科教員有志で企画を立ち上げ、教員が考えた企画に学生の意見を取り入れていくという形で準備が進んでいきました。Nursing café ‘和’で何を行うかという内容はもとより、この企画について、いかに高校生や、地域の住民の方々、学内の学生、教員、職員の皆さんに知っていただくかについても検討し、Facebookを立ち上げたり、メールリストを作ったりしながら、徐々に準備を進めていきましたが、結局は、大学祭の1週間前になって、急にバタバタと準備を進め、その中で、学生・教員がお互いにアイデ

アを出し合いながら企画を作り上げていきました。

大学祭初日はあいにくの雨。どの程度の方がこの企画に訪れてくださるのか、本当に心配でしたが、悪天候の中でも、1日目は100名を超える方の来場があり、2日目は天気も改善し、1日目を上回る200名を超える方に看護学科棟にお越しいただきました。想定以上の来場者に対し、スタッフの数が足りず、また、準備不足も多々あり、次年度に向けて多くの課題を見つけることもできました。来場いただいた方からのアンケートでは、来年も是非頑張ってくださいというコメントをいただきました。子どもから高齢の方まで、幅広い年代の方にお越しいただきました。



本年度は、会場を2ヶ所とし、第1会場では、手指のアロママッサージ、協定大学である韓国の慶北大学校との交流の様子についてのパネル、卒業生の動向について

のパネル、看護学科を紹介するパネルなど、パネル展示も行いました。また、血圧測定、身長・体重測定、視力検査、握力測定などの身体計測も実施しました。看護学科病理学担当医師の協力による、臓器標本の展示には、多くのご来場者が興味を示されていました。第2会場では、看護学生が臨床実習を行う上で非常に重要になってくる、‘身体の観察’のトレーニングに使用している、様々なシミュレーションモデルなどの展示を行いました。来場者の方からは、「こういったものを使って練習をしているんですね」「こんな勉強をしているとは全然知りませんでした」というようなコメントをいただきました。

この企画を共に作り上げた、学生・教員ともども、2日間本当に大変でしたが、やって良かった!!という思いで一杯になりました。次年度は、今年度の反省点も含め、さらに充実した内容で、Nursing café ‘和’が開店できればと考えています。

Special Feature 寄稿

附属病院でのクリスマスイベント

医学部医学科1年
中根 千夏

こんにちは。

少々季節外れではありますが、前年の12月に参加した、附属病院でのクリスマスイベントについてお伝えします。このイベントは小児病棟に入院していることのために看護師やたんぼ学級のスタッフの方々が毎年行っているもので、2003年度以降、グレゴリー・オーダウド先生の呼びかけの下、医学科・看護学科の1年生も数名ずつボランティアとして参加させていただいています。今年は例年に比べボランティアの学生の人数も多く、活気のあるものになりました。

私たちボランティアの仕事はカードやプレゼントの準備とイベントで出し物をする事でした。カードは学生による手作りのものを、プレゼントは学生や大学及び附属病院に勤務する教職員の方々から寄付されたものを贈りました。イベントの出し物では、医学科の学生がクリスマスにまつわる手作りの紙芝居とクリスマスソ

ングを披露し、看護学科の学生がハンドベルでクリスマスソングを演奏しました。

こうして文章にすると短いのですが、実際にボランティアとして準備を行うとひとつひとつの作業に時間と気遣いが必要でした。入院していることにもどんなものを贈れば喜んでくれるのか想像しながらの作業でしたし、準備を始めたころはカードやプレゼントが思うように集まらず困りました。特に、ボランティアはほとんどが女性だったため、男の子へのプレゼントを考えるのは大変でした。男性からのプレゼントの寄付や、男性の兄弟がいるボランティアのアドバイスを踏まえてプレゼントを包みました。また、プレゼントを包む前には、全てのプレゼントを消毒し、できるだけ綺麗なものを贈るようにしました。受け取ることも年齢や性別を考慮してプレゼントを選び、カードを添えて包む作業では、『どんなプレゼントならばこの年齢の子はよろこんでくれるかなあ?』とみんなで悩み、話し合いながら選んでいきました。手作りの紙芝居も、子どもが楽しく、興味を持って聞いてくれるわかりやすいものを作ろうと試行錯誤して作りました。あまり時間に余裕はありませんでしたが、自分たちにできる精一杯のことができたと思います。

そうして迎えたイベント当日。自分たちの出番が来るまでは本当に喜んでもらえるか不安でしたが、ハンドベルやクリスマスソングに手拍子をしてくれたり、紙芝居を聞いて笑ってくれたりする子供たちの姿を見てとても安心しました。同時に、子供たちの目を輝かせている姿や、オーダウド先生扮するサンタからプレゼントをもらった子供たちが近くにいた私たちにもお礼を言ってくれたことから、クリスマスイベントを本当に楽しんでくれていることが伝わってきて、とてもうれしく思いました。

今回のイベントでは、病棟に入院している子供たちと直接触れ合うという貴重な機会をいただきました。残念ながら長くお話しすることはできませんでしたが、すでに医療現場で働いていらっしゃる医師や看護師の方々の姿を間近で見ることができ、将来医療従事者として患者さんとのように接していくべきかを考えるよいきっかけになりました。

興味のある方は、来年のイベントにぜひ参加してみてください。





◀仕事の風景。病理標本を用いた標的分子の発現評価を行っています。

職場集合写真▼



Alumni News 卒業生は今

Alumni News 新薬を世に送り出すために

医学科26期生(平成17年3月卒業)
永妻 晶子(旧姓:河野)

みなさんはじめまして。そして「99」のみなさん、ご無沙汰しております。今回NEWSLETTERへの寄稿の話をいただき、浜松を離れてからもう10年が経過しようとしていることを感慨深く思い返しました。私は卒後臨床研修制度必修化2年目にあたり、2005年3月に浜松医大を卒業後は自治医科大学附属病院で卒後臨床研修制度の初期研修と内科後期研修を受けました。その間に腫瘍内科学の専門家と出会ったことでMedical Oncologistの必要性を実感し、栃木県立がんセンターおよび国立がん研究センター中央病院でレジデントとして抗がん剤治療をはじめとするがんの内科診療を研修しました。がん専門病院には抗がん剤治療の実施が主な目的で来院するため、Performance statusの良い、いわゆる「元気な」がん患者さんとたくさん接してきました。しかしながら私たち腫瘍内科医ががん患者さんに行っている医療はあくまで「緩和的治療」であり、「元気な」がん患者さんの病態が一気に悪化し亡くなられる現実を変えることができません。そんな中、国立がん研究センター東病棟のPhase1チームへ研修に出てFirst in human trialを含む多くのPhase 1 trialを経験しました。ほとんど人

体へ投与されたことのない薬剤(compoundと呼んだ方がよいかもかもしれません)がどのように作用しそして有害事象を引き起こすのか、気の抜けない毎を送りました。その薬剤では世界で初めての重篤な有害事象に遭遇し緊張感を持って対処することもありました。この貴重な経験がきっかけで新規抗がん剤開発に携わる仕事をしたいと思うようになり、さらにタイミングよく分子標的薬剤のTranslational Research(TR)研究をやらなにかというお誘いを受け、現在では臨床を離れて、国立がん研究センター東病棟の臨床開発センター 臨床腫瘍病理分野でTR研究と胃癌の基礎研究をしています。

TRは基礎研究の成果を医薬品開発及び実用化につなげる道筋にあたる研究分野で、私は病理組織を用いて主に企業が有するcompoundについて、標的分子発現診断開発や判定基準策定、標的分子の疫学研究(癌種ごとの発現プロファイルや臨床病理学的特徴との相関をみる、等)を行っています。臨床医として仕事をしていた頃、新規薬剤のあらゆる情報は企業側からもたらされるものでしたが、これらデータ作成に直接関わり、さらに企業側の開発に対する考え方に触れることもでき、

一つの新しい抗がん剤が生み出されていく過程を今まさに実験しているところです。新規薬剤はあらゆる癌種への適応を常に考えて開発が進むことからTR研究において取り扱う癌種も多岐に渡っており、ここにあらゆる癌種の治療を幅広く扱う腫瘍内科学を学んできた経験を生かすこともできます。期せずして誘われるがまま専門外の分野に飛び込みましたが、現在はとても充実した日々を送っています。今後は、新規抗がん剤の承認まで至るような仕事をするのが大きな目標です。

最後になりますが、実は国立がん研究センター東病棟は副院長の小西先生をはじめ浜松医科大学卒業生が多く在院しており、時には浜医会も開催されています!写真の時には中央病院の井垣先生にも参加いただき、実に盛況な宴が開催されました。



浜医会の様子。偉大な先輩を囲んで大いに盛り上がりました。

セルフ健康チェックのサービスの様子▶



ケアプロ8期事業報告会での全員集合写真▼



Alumni News 看護師・保健師はもっと活躍していい!!

看護学科10期生
(平成18年3月卒業)
稲葉 公子

～大学病院▶透析病院▶訪問看護ステーション▶ソーシャルベンチャーという働き方を通して～

私は2008年に浜松医科大学を卒業し、大学病院脳神経外科、透析病院、訪問看護ステーションでの勤務を経て、現在「ケアプロ株式会社」というソーシャルベンチャー(社会起業家が立ち上げた組織)で働いて4年目になります。

社長の川添さんは現在32歳の看護師で、社会起業家です。社会起業家とは、社会変革(Social change)の担い手(チェンジメーカー)として、社会の課題を、事業により解決する人のことを言います。(Wikipediaより引用)

事業内容としては、『セルフ健康チェック事業(=予防医療事業)』『訪問看護事業(=在宅医療事業)』の2つがあります。セルフ健康チェックとは、全国の駅やスーパー、時にはパチンコ店に出向き、血糖値や骨密度などを測定し、その場で結果・改善方法をお伝えすることで健康増進・悪化予防のきっかけとなる場を提供するサービスです。常設店舗は、2015年1月現在2店舗(中野店・小田急登戸店)で、今後5年間で大都市の主要駅などに50店舗出店する方針です。訪問看護は、東京2カ所のステーションで24時間365日のサービス提供をしています。こちらは平均年齢が28歳と若く、新卒で訪問看護師の受け入

れをする試みも行っています。参考までに、夜間や土日祝日に対応できるステーションは全体の1割程度しかなく、看護師の平均年齢も40代となっています。

ケアプロと出会った時、私自身の先入観ですが「看護師は病院・保健師は行政か企業」が染みついており、「看護師が起業?」とまったくぴんと来なかったのですが、難しいことをしているわけではなく、いま世の中になければ必要なサービス・看護師の活躍の場を創りだしている会社でした。参画のきっかけはケアプロのみんなの人柄に惚れたことだったのですが、今ではケアプロのMVV(ミッション・ビジョン・バリュー)に共感して、使命感に燃える日々を過ごしています。特に予防医療事業は普段どんな仕事をしているのかイメージが湧きにくいと思いますのでご紹介させていただくと、看護師として出張イベントに出向いたり、どうすればサービスの質や売上げが上がるかMTGをしたり、スタッフの採用や育成をしています。

将来は、ここで学んだことを生かし社会に貢献できるような看護師になりたいと思っています。題名にも書かせていただきましたが、私の周りには、医師や看護師といった肩書や先入観にとらわれず、生き

生きと活躍されている医療者がたくさんいます。大学1年生のときの授業で、「医療者は仕事ではなく、生き方」と言われたことがとても印象に残っています。私たちの見たこと経験したことは、必ず医療者として役に立つと信じています。

学生みなさんも、時間があるうちに様々な価値観に触れたり、インターンをするのもいいと思います。現在病院で働いているみなさんも、少しだけいつもと違うところに目を向けてみるのもいいと思います。一度きりの人生を、もっと欲張りに活躍していきましょう!!



ケアプロ健康サイクル。ケアプロでは、美容院に行くような感覚で、気軽に定期的に健康サイクルを回して、生活習慣病を予防する新しいスタイルを提案しています。そして、一人ひとりの予防が進むことで、我が国の医療費削減にも貢献していくことを目指しています。

科研費審査員の表彰

10月31日(金)に、科学研究費助成事業の第一段審査において有意義な審査意見を付し公正・公平な審査に大きく貢献したということで、本学職員3名が日本学術振興会から表彰されました。平成26年度の科研費審査員の表彰は、約5,300名の第1段審査(書面審査)委員の中から170名が選考されました。

日本学術振興会から届いた表彰状と記念品は、学長より表彰者に手渡されました。先生方のご活躍により、本学では初めて表彰されることとなりました。



表彰された先生方



耳鼻咽喉科・頭頸部
外科学講座 教授
峯田 周幸

内科学第二講座
教授
須田 隆文

産婦人科家庭医療学
講座 特任教授
杉村 基

シンガポール共和国の 高校生が来学しました

シンガポール共和国の高校生10名と教員3名が、11月11日(火)に来学し、施設見学や学生との交流を行いました。

今回の訪問は、独立行政法人 科学技術振興機構による日本・アジア青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプラン」に採択された公益財団法人 光科学技術研究振興財団の事業により実施されました。

本学紹介ビデオの視聴後、学長からの歓迎あいさつがあり、図書館・研究施設・病院などの見学をしました。

また、学生食堂にて本学学生と昼食会をして、交流を深めました。



■ 浜松医科大学建学の理念

第1に優れた臨床医と独創力に富む研究者を養成し、第2に独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し、第3に患者第一主義の診療を実践して地域医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康と福祉に貢献する。

■ 浜松医科大学の目的及び使命

浜松医科大学は、医学・看護学の教育及び研究の機関として、最新の理論並びに応用を教授研究し、高度の知識・技術及び豊かな人間性と医の倫理を身に付けた優れた臨床医・看護専門職並びに医学研究者・看護学研究者を養成することを目的とし、医学及び看護学の進展に寄与し、地域医学・医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康増進並びに福祉に貢献することを使命とする。

編集 後記

ニュースレター今年度第2号をお届けします。どのページもカラフルで活気あるものになりました。退職される方々とのあれこれも思い返されます。忙しい中原稿を寄せていただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

今年度は開学40周年の節目にあたりました。シンボルマークもできました。益々の発展を・・・といえば決まり文句になりますが、(左側の)「浜松医科大学建学の理念」と「目的及び使命」を読み返してみるのもよいかも知れません。

ニュースレター編集委員 T.N.

原稿 募集

小誌をご覧になられた感想はいかがでしたでしょうか。読後のご感想やご意見をお寄せください。また、各欄(「研究最前線」「海に向こうで」「大学ニュース」「寄稿」「卒業生は今」など)への投稿や本学に関連する写真を、随時、募集しています。

職員や学生だけでなく、広く関係者の方々からのご提案をお待ちしております。誌面づくりに、ぜひご参加ください。

広報室 koho@hama-med.ac.jp

編集・発行

浜松医科大学ニュースレター編集委員会

発行日

平成27年3月1日

お問い合わせ

国立大学法人浜松医科大学 広報室
〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山一丁目20番1号
TEL.053-435-2111(代表) <http://www.hama-med.ac.jp/>